

柳田國男による『グリム童話集』の読書過程

——柳田文庫所蔵 KHM (第七版) の書き込み調査——

横山 ゆか

1. はじめに

柳田國男が青年時代から洋書に親しみ、また日本に民俗学という新しい学問を形成、構築していく過程で欧米諸国の研究を積極的に取り入れたということ⁽¹⁾は、これまでに多くの研究者たちが指摘してきた。特に、アナトール・フランスの諸作品やハイネの『流刑の神々』、後にはフレージャーやジョージ・ローレンス・ゴムなどに代表されるイギリス民俗学や人類学、サンテューヴやベティエ、ユエなどのフランスの口承文芸研究、さらにドイツのグリム童話に関する研究が柳田民俗学に影響を与えたとされている。⁽¹⁾

かしながら、柳田國男は執筆時に外国の参考文献を明示していないことがほとんどで、いかにして西欧の研究成果を自身の学問に取り入れたのか、その過程を探るのは容易ではない。⁽²⁾

柳田國男の年譜によると、柳田は国際連盟委任統治委員として大正十年(一九二一年)五月に渡欧し同年十月に一時帰国、大正十一年(一九二二年)五月に国際連盟委任統治委員会の仕事のため再び渡欧し、大正十二年(一九二三年)九月、渡欧中に関東大震災の報を受け帰国している。⁽³⁾滞欧中、柳田はジュネーヴを拠点としてヨーロッパの各地を旅行し、ドイツでは『グリムの御伽話細註』⁽⁴⁾など多くの本を買って日本に送っている。帰国後、柳田はこれらの洋

書を紐解き、その研究成果を挙げていく。現在、柳田が購入した洋書群は、成城大学民俗学研究所所蔵の「柳田文庫」に収められている。この「柳田文庫」には雑誌を含めて約三万七〇〇〇冊の図書が収められており、そのうち洋書の単行本が一四三四冊、洋雑誌が約九〇〇冊収録されている⁽⁵⁾。これらの洋書の中には英語だけでなく、ドイツ語、フランス語、イタリア語の文献も見られ、読了自記や、赤ペンによる下線や欄外メモが多数書き込まれている。これらの書き込みは、柳田が欧米諸国の研究をいかにして涉猟したか、その過程を探る上で直接的な手がかりとなりうる。

柳田文庫所蔵の洋書文献を手がかりに、柳田とヨーロッパの口承文芸学との関係に焦点を当てた先行研究として、高木昌史氏による共同研究や田中藤司氏、高橋治氏の研究等が挙げられる⁽⁶⁾。高木氏の共同研究は、柳田文庫に収められている英独仏を中心としたヨーロッパ諸国の口承文芸に関する文献の比較調査であり、その文献調査は雑誌・機関紙類にまで及んでいる。一方、高橋氏は柳田文庫に収められている洋書の納品伝票や書店票、読了自記を手がかりに一九〇〇年代から一九三〇年に至るまでの柳田の洋書講読

の過程とその全体像を把握しようと試みており、田中氏は柳田國男が読了年月日を記した一一〇点の目録を作成している。しかしながら、柳田文庫の膨大な量の洋書に比すればこれらは研究の一端であり、特に書き込みについての詳細な調査・研究は発展途上の段階にあるように思われる。前述したように、ハイネの他には特にイギリスの民俗学、人類学が柳田の民俗学に大きな影響を与えたとされてきているが、柳田文庫に所蔵されている仏語文献、独語文献の研究はほとんどが手付かずのままであり、これらを研究することにより新たな視点から柳田民俗学を捉えなおすことが出来るのではないだろうか。そこで本稿では、柳田文庫に所蔵されているドイツ語文献の中でも書き込みの多いグリム兄弟の『子供と家庭の童話集』第七版（原書）を調査し、柳田が昔話研究を行うにあたり、何を主眼としてきたのか、その一端を覗いてみたい。

2. 柳田文庫所蔵レクラム文庫版

『子供と家庭の童話集』について

柳田文庫に収められている『子供と家庭の童話集』（以下、KHMと略記）のテキストは以下の三冊である。

- ・ Grimm, Jacob und Wilhelm. Kinder- und Hausmärchen: gesammelt durch die Brüder Grimm. Vollständige Ausg. Bd.1. Leipzig, P. Reclam. (Reclams Universals-Bibliothek)
- ・ Grimm, Jacob und Wilhelm. Kinder- und Hausmärchen: gesammelt durch die Brüder Grimm. Vollständige Ausg. Bd.2. Leipzig, P. Reclam. (Reclams Universals-Bibliothek)
- ・ Grimm, Jacob und Wilhelm. Kinder- und Hausmärchen: gesammelt durch die Brüder Grimm. Vollständige Ausg. Bd.3. Leipzig, P. Reclam. (Reclams Universals-Bibliothek)

柳田文庫所蔵のKHMは決定版(第七版)のもので、第一巻の冒頭には、一八四三年版(第五版)のKHMが刊行された際、ベッティーナ・フォン・アルニム婦人に宛てたヴィルヘルム・グリムの献辞が見られる。また、第一巻にはKHM 一番から八七番、第二巻にはKHM 八八番から二〇〇番および子供の聖者伝十話が収録されており、第三巻はグリム兄弟自身による注釈編となっている。⁽⁷⁾

ところで、この三冊のレクラム文庫版KHMには刊行年が書かれていない。しかしながら、各巻の表紙にはタイトルと共にレクラム番号が記載されており、このレクラム番号から柳田文庫所蔵のKHM刊行年を推定することが出来る。柳田文庫所蔵の第一巻のレクラム番号はNr.3191—3194⁶、第二巻はNr.3195—3198⁶、第三巻はNr.3446—3450となっている。WorldCatのデータベースによる⁷ KHMの決定版が初めてレクラム文庫から刊行された年は一八八四年(第一巻および第二巻)と一八八五年(第三巻注釈編)で、その時のレクラム番号は第一巻がNr.3191—3193⁶、第二巻がNr.3194—3196⁶、第三巻がNr.3446—3450⁶である。その後、第一巻、第二巻は一八九七年にもそれぞれ刊行されているが、この時のレクラム番号は一八九四年に刊行された番号と同じである。次に刊行されたのが、一九〇〇年頃なのだが、刊行年は書誌情報によると「ca.1900」(一九〇〇年頃)としか書かれておらず、はっきりした刊行年は不明である。しかしながら、この一九〇〇年頃に刊行されたKHMのレクラム番号が柳田文庫所蔵のものと同じしており、この一九〇〇年頃の版の次に刊行されたレクラム版KHM(決定版)の刊行年は一九二〇年で、第一巻の番号

が Nr.1.391—1393a、第二巻が Nr.3194—3196a となっている⁽⁸⁾。以上のことから、柳田文庫所蔵のレクラム文庫版 KHM は一九〇〇年頃に刊行されたものと考えられる。

柳田文庫所蔵の本には読了自記のあるものが多数見られるが、この KHM 三冊には読了自記がなく、書店票や納品伝票など、購入先や入手時期に結びつくものも見られず、講読の開始時期もはっきりしたことはわかっていない。柳田文庫所蔵の KHM が刊行されたと思われる一九〇〇年（明治三十三年）といえば、柳田が東京帝国大学を卒業し、大学院に在籍しながら農商務省に勤務し始めた年である。柳田は、一高在学中（一八九三年—一八九七年）からよく古書店で外国文学書を集書し、一九〇〇年頃からは丸善を介して洋書を購入し、「土曜会」「文学界」「龍土会」「イブセン会」等でツルゲーネフ、ハイゼ、メンゲル、イブセン、ハイネなど諸作品の報告をしていた。高橋氏の調査によると、柳田が所蔵していたハイネやクライスト等のレクラム文庫には柳田による読了自記、および和歌が見られるのだが、読了自記の一番古いものは明治三十一年五月十七日、新しいもので明治三十八年十月二十六日である⁽⁹⁾。各レクラム文庫版書籍の購入時期は判明されていないが、読了

年月日がどれも明治三十年代であることと、巻末に柳田家に入る前の姓である「松岡」の名が記されていることから（柳田は明治三十四年五月二十九日に柳田家の養嗣子として入籍している⁽¹⁰⁾）、柳田がレクラム文庫版の書籍を購入していた時期は主に明治三十年代であつたと考えられ、レクラム版 KHM もこの頃に購入していた可能性がある。

また、講読時期を示す手がかりになりうるのだが、柳田文庫所蔵の KHM 第一巻には、昭和十年（一九三五年）八月十七日から二十一日にかけて長野県上諏訪町において行なわれた「霧が峰山の会」の案内状が挟まっている。定本の年譜によると柳田は昭和十年八月十八日信州の山の会で「狩と山の神のこと」、十九日には「山の幻覚のこと」を講義している。おそらく再読であろうが、とにかくこの頃、集中して KHM を読んでいたようである。

3. KHM への書き込み箇所

次に、柳田文庫所蔵の KHM 三冊への柳田による書き込み箇所を以下に記す⁽¹¹⁾。書き込みには赤鉛筆によるものと赤ペンによるものがあることから、少なくとも二度にわたっ

てKHMを読んでいたことが推測される。

まず初めに、目次の頁から見ていく。目次の頁には以下のKHM番号の隣に赤鉛筆または赤ペンによる○印が見られる。また、第一巻、第二巻には目次、および本文中のKHM番号の隣に赤ペンによる数字がところどころに書き込まれているのだが、この数字は、世界童話大系刊行会より『世界童話大系』第二巻独逸篇(1)(大正十三年八月)および第二十三巻独逸篇(2)(昭和二年三月)として出版された『グリム童話集』の通し番号と全て一致している。柳田文庫にはこの金田鬼一訳の『グリム童話集』は所蔵されていないが、金田訳の通し番号の書き込みは、柳田が金田訳を参考にしながらKHMを読んでいたことを示唆している。以下、本文中に見られる柳田による書き込み、および、赤ペンによって書き込まれた数字を◇内に記す。

第一巻の目次(○印のチェックがあるもの)

二 Katze und Maus in Gesellschaft 「猫と鼠の共暮ら
し」¹ 一八 Strohhalm, Kohle und Bohne 「藁と炭と豆」
(²のらに頁数に下線) 二一 Aschenputtel 「灰かぶり」
二八 Der singende Knochen 「歌う骨」 三二 Das
Mädchen ohne Hände 「手なし娘」 三三 Daumesdick
「親指小僧」(⁴のらに頁数に下線) 四八 Der alte
Sultan 「老犬スルタン」(赤ペンで○印) 六五
Allerleirauh 「千匹皮」 七八 Der alte Großvater und
der Enkel 「年取ったおじいさんとその孫」(赤ペンで
○印) 八七 Der Arme und der Reiche 「貧乏人と金持
ち」(赤ペンで○印)。その他 一二 Rapunzel の番
号の横に○印。上から×印。

第二巻の目次(○印のチェックがあるもの)

八九 Die Gänsemagd 「がちょう番の娘」(頁数の横に
<102>の書き込み) 九八 Doktor Allwissend 「物
知り博士」 一〇八 Hans mein Igel 「ハンスはりねず
み」(○印の横にさらに×印) 一一二 Der
Dreschkegel vom Himmel 「天国のからぶお」 一二五

Die weiße und die schwarze Braut 「白く花嫁と黒い花

嫁」(ゆがに頁数に下線) 一四二 Simelberg 「シメリ
山」

付箋紙が挟まっている話、および本文への書き込み箇所
は以下の通りである。

第一巻

一 Katze und Maus in Gesellschaft 「猫と鼠の共暮ら」
(白く付箋紙)

一五 Hansel und Gretel 「ヘンゼルとグレーテル」

・私のお話はこれでおしまい。あそこにハツカネズミ
が走ってる。あれを捕まえた者は、あれで大きな、大
きな毛皮の帽子をこしらえもよろしい。(赤ペンで下
線。横に赤ペンでく印)

一六 Die drei Schlangenblätter 「三枚の蛇の葉」(番号の
横に赤ペンでく印)

一八 Strohalm, Kohle und Bohne 「藁と炭と豆」(紫色
の付箋紙)

・でも藁は燃え出し、二つに切れて、小川の中に落ち

てしまいました。(赤鉛筆で下線)

二一 Aschenputtel 「灰かぶり」(ピンク色の付箋紙)

二八 Der singende Knochen 「歌う骨」(薄い緑の付箋紙)

・彼「羊飼」が初めてそれ「角笛」を吹いてみる
と、小さな骨がひとりでに歌い始めたので、羊飼いは
大変びっくりしました。……彼「羊飼」がそれ「角
笛」をもって王様の前に出た時、小さな角笛はまたも
や小唄を歌い始めました。(赤鉛筆で下線。最初の下
線部に赤鉛筆で○印)

三二 Das Mädchen ohne Hände 「手なし娘」(群青色の
付箋紙。番号の横に○印)

・そこへ、信心深いお后にいつも害を加えようとして
いる悪魔がやって来て、その手紙を別の手紙とすり替
えてしまいました。そこにはお妃が取り替え子を産ん
だと書いてありました。(赤鉛筆で下線。横に赤鉛筆
で○印)

・彼女「年寄りのお母様」は彼女「お妃」の背中にそ
の子をしばりつけ、その哀れな女は泣きながら立ち去
りました。(横に赤鉛筆で○印)

三四 Die Kluge Else 「賢いエルゼ」(ピンクの付箋紙)

三七 Daunesdick 「親指小僧」(タイトルの横に赤鉛筆で〈一寸法師〉の書き込み)

五六 Der Liebste Roland 「恋人ローラント」(先述の「山の会」の案内状が挟んである)

六五 Allerleirauh 「千匹皮」(薄い黄色い付箋紙)

・そうして彼ら「狩人たち」は言いました。「千匹皮、お前は台所がお似合いだ。さあ、来い。台所で灰をかき集めたらよかるう。」(赤鉛筆で下線)

・顔と手の煤を洗い落とすと、申し分のない美しさがまた現われました。それから彼女「千匹皮」は胡桃を開けて、太陽のように輝くドレスを取り出しました。そして前の時みたいに、祝宴に行き、誰もが彼女のために道をあげました。というのも、誰も彼女のことは知らず、どこかの王女様に違いないと思ったからです。(右の箇所¹に赤鉛筆で傍線)

七六 Die Nelke 「なじこ」

・彼らが生きているかどうか、それは神様次第だ。

(横に赤ペンで✓の印。本文に赤ペンで「の印」)

八〇 Von dem Tode des Hühnchens 「雌鶏の死の話」

・これでみんな死んでしまいました。(横に赤ペンで

✓印)

八一 Bruder Lustig 「陽気な兄貴」

・それから陽気な兄貴はまだ長いこと世の中を歩き回っていました。もしそれを知っている人がいれば、それについて多くを語っていたことでしょう。(赤ペンで✓印)

八四 Hans heiratet 「ハンスが結婚する」

・お前さんも結婚式に行ったのかい？ああ、行つたとも、めかしこんでね。私の帽子は雪でできていてね、それでお日様が出たら解けちまつた。私のドレスは蜘蛛の巣でできていてね、それで茨を通つたら破れちまつたよ。私の靴はガラスでできていてね、それで石につまづいたら、ピシッと行ってまつぶたつに割れちまつたのさ。(赤ペンで✓印)

八六 Der Fuchs und die Gänse 「狐とガチョウ」(番号の横に〈9〉と赤ペンで書き込み)

・それで彼ら「鶯鳥たち」のお祈りが済めば、このお話の続きが出来るのだけど、いまだにずっとお祈りをしているの。(赤ペンで〈ハテナシ話〉と書き込み。赤ペンで✓印)

八七 Der Arme und der Reiche 「貧乏人と金持ち」

・大昔、神様がまだご自分の足で下界を歩いていた頃のこと、ある晩、神様はお疲れになったのですが、宿を見つげる前に、夜が来てしまいました。(赤ペンで〇印)

第二卷

八八 〈101〉 Der singende Springende Löweneckerchen

「踊って跳ねるヒバリ」

九〇 〈103〉 Der junge Riese 「若い巨人」

・お代官とその妻がまだ空中に漂っているかどうか私たちは知らないね。でも若い巨人は自分の鉄の棒を担いでいってしまいました。(右の箇所)に赤ペンで傍線

九一 Dat Erdmännchen 「大地の小人」

・「その時、私はガラスの靴をはいていたのだけどね、石につまずいちゃって、「ピチリ!」といって靴が壊れちゃったのよ」(赤ペンで✓印)

九六 De drei Vögelkens 「三羽の小鳥」

・その間に子供たちは大きくなりました。ある時、一番年上の兄さんが他の年下の二人を連れて、魚を捕り

に出かけました。すると他の子供たちは「捨て子やい、あっちへ行け」と言つて兄さんを仲間に入れてくれませんでした。(赤ペンで下線、横に✓印)

九八 〈111〉 Doktor Alwissend 「物知り博士」(111の書き込みの横に赤鉛筆で〇印)

一〇二 Der Zaunkönig und der Bär 「ミンサザイと熊」(番号の隣に✓印)

一〇五 〈116〉 Märchen von der Unke 「ウンケの話」

一〇七 〈121〉 Die beiden Wanderer 「二人の旅人」(番号の隣に✓印)

一〇八 Hans mein Igel 「ハンスはりねずみ」(番号の隣に赤鉛筆で〇印。赤鉛筆で〈田螺長者〉の書き込み)

・彼「百姓」はついに怒つて、家に帰つて言いました。「子供が欲しい。ハリネズミだつてかまわない。」するとおかみさんに子供ができ、その子は上がハリネズミで、下が人間の体でした。そしておかみさんがその子を見ると、びつくりして言いました：「それ見たことか、あんたが私たちに呪いをかけたんだよ。」

・そこに男達がやつて来て、ハリネズミの皮を持ち去り、火の中に投げ入れてしまいました。火が皮をなめ

つくしてしまふと、彼「ハンスハリネズミ」は解放され、ベッドにまったく人間の形で横になっていました。……しかしお父さんは、自分に息子はいない、一人いたが、そいつはハリネズミ同様、針をはやして生まれてきて、どこかに行ってしまった。……年寄りのお父さんは喜んでハンスと一緒にハンスの王国に行きました。(赤鉛筆で下線。「針をはやして」の横に✓印)

・私の話はこれでおしまい、グストちゃんの前をお家が歩いている。(赤ペンで下線。横に赤ペンで○印)

一一一 Der Dreschfliegel vom Himmel 「天国のからやぶお」

・ところが彼「百姓」が再び道を引き返すと、その穀粒から木が生長して、天まで届いていました。(横に赤鉛筆で〈豆の木〉の書き込み)

・そうして彼「百姓」は上まで登って、天使たちが上で燕麦を脱穀しているのが見え、それを一緒に見えました。(赤鉛筆で下線)

・ところがつるはしを持っていたのが幸運で、彼「百姓」はそれで段々を作って、上へ登っていきました。そして穀ぎおを証拠として持っていたので、誰もその

話を疑うわけには行きませんでした。(右の箇所にも赤鉛筆で傍線)

一一三 De beiden Königskinner 「二人の王様の子供」

・このお話をつい先日にくれた人の口は、まだ温かい。(赤鉛筆で下線。横に赤ペンで✓印)

一一四 Vom klugen Schneiderlein 「賢い仕立て屋の話」

・それを信じない者は1ターラー支払う。(赤ペンで下線。横に赤ペンで✓印)

一一五 (126) Die klare Sonne bringt's an den Tag 「お天道様は明るみに出す」

一一八 (132) Die drei Feldscherer 「三人の軍医」

一二〇 (135) Die drei Handwerksburschen 「三人の職人」

一二六 Ferrenand getrü un Ferrenand ungetrü 「忠実なフェレナントと不実なフェレナント」(話の最後に横に赤ペンで書き込みがあるが判読不能)

一二七 Der Eisenofen 「鉄のストーブ」

・そら鼠が出てきた。お話はおしまい。(赤ペンで下線。横に赤ペンで△印)

一三〇 (146) Einäuglein, Zweiäuglein und

Dreianglein 「一〇日、二〇日、三〇日」

一三一（148）Die schöne Katrinelje und Pif Paf Poltrie「美しいカトリネリエとピフ・パフ・ポルトリー」

一三四（151）Die sechs Diener「六人の家来」

一三五 Die weiße und die schwarze Braut「白い花嫁と黒い花嫁」（番号に赤鉛筆で下線。赤鉛筆で〈皿々山〉の書き込み）

・彼「お兄さん」は妹の絵を描いて、自分の部屋にかけておきました。（横に赤鉛筆で〈エスガタ女房〉の書き込み）

・しかし宮殿の召使達は御者が毎日美しい絵の前に立っていることに気がつき……（赤鉛筆で下線）

・そのような女は服を脱がせて裸にし、釘が打たれた樽の中に入れて、樽の前に一頭の馬をつけ、馬を世界中行かせるのが良からう。（赤鉛筆で〈白ニ入レテ〉の書き込み。その横に赤ペンで○印）

一四二（159）Simelberg「ジメリ山」（159の数字の書き込みの隣に赤鉛筆で○印。さらに赤ペンで〈隣爺型？？？〉の書き込み）

一四三 Up Reisen gohn「旅に出る」（紫の付箋紙。番号

の横に〈ヲロカム子〉の書き込み）

一四四（162）Das Eslein「小さなロバ」（162の数字の書き込みの隣に○印。赤鉛筆で〈田ニシ長者〉の書き込み。以下の下線は全て赤鉛筆によるもの。）

・ついに神様がお妃の願いを叶えてくれました。でも、子供が生まれると、その子は人間の子のような姿ではなく、小さなロバの子でした。

・しかし王様は言いました。「いや、神様がその子をお授け下さったのならば、その子もまた私の息子であり、私の世継ぎであるべき。私の死後、王位に就き、王冠をかぶるべきなのだ。」

・「いやだ。」とそれ「ロバの子」は言いました。「私は王様の傍へ座りたいのだ。」

・すると王様は言いました。「お前を満足させるようなものが知りたいのだが。わしの娘を妻にしたいか？」
「はい、いかにも。」とロバの子は言いました。「いかにもお姫様を頂戴したいです。」

・二人が中に入り、お姫さんがドアに門をかける、辺りを見回して、二人しかいないことを確認すると、お姫さんは突然ロバの皮を脱ぎ捨てました、するとそこ

には美しく、堂々とした青年が立っていました。

一四七 Das jungegefühle Männlein 「焼かれて若返った小男」

・その晩、二人は男の子を生みました。その子たちは人間に似てはおらず、猿のようで、森の中にかけて行ってしまった。そして猿の種族は彼らに由来するのです。(右の箇所)に赤ペンで傍線。横に赤ペンで○印と✓印)

一五一 (169) Die drei Faulen 「三人の怠け者」

* 一五一 (170) Die zwölf faulen Knechte 「十二人の怠け者の召使い」

一五二 (171) Das Hirtenbrühdlein 「羊飼いの男の子」

一五八 (178) Das Märchen von Schlauffenland 「のらくら者の国の話」

一七一 Der Zaunkönig 「ミンサザイ」(以下の箇所に赤鉛筆で傍線)

・むかし、むかし、どんな音もまだ意味を持っていた。鍛冶屋の槌が鳴り響く時というのは、槌が「スミート ミ トー! スミート ミ トー!」(「おいらを鍛えろ! おいらを鍛えろ!」)と叫んでいるの

でした。指物師の鉦がシューシュー立てる音は、鉦がこう言っていたのです。「ドル ヘスト! ドル ドル ヘスト!」(「そらでた! そら、そらでた!」)。

水車の輪がカタカタ音を立て始める時は、輪がこう言っていたのです。「ヘルプ、ヘア ゴット! ヘルプ、ヘア ゴット!」(「助けて、神様! 助けて、神様!」)。そして粉引きが嘘つきで、水門を空けると、水門は標準ドイツ語を喋って、初めはゆっくりと尋ねたのです。「ヴェア イスト ダー? ヴェア イスト ダー?」(「そこにいるのは誰だ? そこにいるのは誰だ?」)それから早口で言うのです。「デア ミュラー! デア ミュラー!」(「粉引だ! 粉引だ!」)。それからついにはものすごい早口で、「シュティールト タップファー、シュティールト タップファー、フォーム アハテル ドライ ゼヒター。」(「おもいきって盗む、おもいきって盗む、8分の1から6分の3。')と言っていたのです。

その頃、鳥たちも自分の言葉と言うのを持っていた。

一七四 Die Eule 「ふくろう」

・それを信じたくない者は、そこに言って自分で聞いて見る。(赤ペンで下線。横に赤ペンで✓印)

一七六(197) Die Lebenszeit 「寿命」

一七七(198) Die Boten des Todes 「死神の使」

一八〇(201) Die ungleichen Kinder Evas 「エヴァの不揃いの子供たち」

一八三(205) Der Riese und der Schneider 「巨人と仕立て屋」

一八四 Der Nagel 「釘」

・急がば回れ。(赤ペンで下線と✓印)

一八六(208) Die wahre Braut 「本当の花嫁」(20

8の隣に赤ペンで〈皿々山〉の書き込み)

一八七 Der Hase und der Igel 「兎とハリネズミ」

・ところで、このお話には教訓があります、一つは、自分がどんなに優れており、身分も人と違うと思っても、つまらないもの、例えばハリネズミのようなものに対しても決して馬鹿にしてはいけないということですよ。二つ目は、お嫁さんをもらうなら、自分と同じ身分の者で、みかけも自分と同じものをもらうのがいいということですよ。(赤ペンで下線、横に✓印)

一八八(210) Sprindel, Weberschiffchen und Nadel 「鍾と杼と針」

一九〇 Die Brosamen auf dem Tisch 「食卓の上のパンくず」

・やつとみんなどこかへ行きました。(赤ペンで✓印)

一九二(215) Der Meisterdieb 「泥棒の名人」

一九四(217) Der Kornähre 「麦の穂」

次に第三巻の注釈編についての書き込み箇所だが、柳田は第三巻の注釈編をあまり精力的に読んでいない。その証拠に、製本の問題で頁と頁が切り離されていない箇所がところどころにある。つまり、柳田はその部分を切り離して読まなかったということになる。しかし、いくつかの書き込みも見られるので、以下にその書き込み箇所を記す。書き込みはKHM六五番に見られる書き込み以外は全て赤ペンによるものである。

一 Der Froschkönig oder der eiserne Heinrich 「蛙の王様と鉄のハインリヒ」

九〇、九一、一〇八、一一三、一一四、一二七、一七四、一八四、一九〇番である。なお、発端句、中句、結末句はどれも赤ペンで下線が引かれており、ある時期に柳田が発端句と結末句に注目して集中的に熟読していたことが窺える。

ところで柳田國男の著作には、発端句と結末句に関するものがいくつも見られる。柳田は昭和六年四月に刊行された雑誌『旅と伝説』に「昔話採集者の為に」⁽¹²⁾を投稿しており、そこで柳田は消えつつある昔話を採集するよう呼びかけている。柳田は昔話採集の便宜を図るために、当時まだ明確でなかった「昔話」という語を伝説や世間話との違いを挙げながら定義づけようと試みている。その際、柳田は発端句と結末句に注目し、形式的な観点および信憑性という点から昔話を次のように定義している。一、必ず冒頭に昔々という一句をそなえて語っている話。二、話法の特徴として「あつたそうな」というような「私はそう聞いています」という意味の語がそなえてある。すなわち、昔話は最初から説く人、聴く人は信じようとしないう、周遊、流伝の力が強い、技術、文芸作品であり、一方、伝説は常に信じられ、又、信じようとしていたもので、土地に定着し、そ

れは記憶、素材という事実である。三、「話は是を以て終わる」といった意味を持つ結末句を有する。

さらに柳田は、昭和十年五月から昭和十一年四月にかけて、「昔話と伝説と神話」(『口承文芸史考』所収)においてさらに詳しい定義を試みて⁽¹³⁾いる。この論考で柳田は、ドイツやフランス、イギリスにおける昔話の名称について述べた後、昔話の発端句や結末句の特徴を外国のものと比較しながら、前述の昔話の定義を以下のように補足している。昔話は、一、「とんと昔」などの発端句や話の区切り、二、「トサ・ゲナ・サウナ・トイフ」などの句がある。これは「信ずべき物語」とは異なることを示しており、外国の昔話にはあまり窺われない。二、固有名詞の省略。三、「ドントハラヒ」などの結末の一句。三つ目の要素に関して、柳田はKHMについて言及し、日本の昔話と比較し、次のように指摘している。

ところともう一つ、是は日本の昔話だけに、幾分か強烈に保存せられて居るらしい第三の形式がある。グリムの説話集にも五つか七つ、最後に奇抜な笑を催すやうな文句を付け添へたものはあるが、他の多数は採

録の際に落ちたものか、何の変哲も無く、事実の終りを以て話しの結びとして居る。我々の昔話はそれと反対に、一つ一つ必ず形式の句があつて、それが地方毎に一定して居る。……一番単純で数の多いのは是でござしむ、又は話はこれだけといふ意味の短句である。奥羽の村々でドンドハラヒと謂い、中国のそちこちでムカシコツキリとか、……すべて全部が終つたといふ言葉の様式化したもので、それを是非とも添へなければならぬ趣意は、本来は一種伝承者の宣誓であり、聽いて知つて居ることは是だけだといふのは、即ちおまけも無く匿しも無いといふことを言明する方式だつたとも解せられる。多分は今ある昔話よりも以前から、聽いて信じなければならぬ説話にも、既に伴々うて居たものだらうと私は思ふ。……アアヴィングのリップ・ヴァン・ウインクルの発端の引用句にも、古いサクソンの神にかけて、自分の物語の偽りでないことを誓つたうけび言が出て居た。白人の国でも元はやはり此趣旨を以て、話毎に斯ういふ一句を付加する風習があつたと見える。それが我邦の昔話では永く今日まで持続して居たのである。

つまり、昔話は「ドントハラヒ」などの結末の一句を有し、これは伝承者の宣誓でもあり、こうした一定の形式の句は外国にはあまり見られず、永く持続してきた日本において比較研究すべき問題である、と指摘している。また柳田は、KHMに見られるような笑いを誘うような結末句は笑話化と並行して発明されたと考えており、KHMに見られる結末句と日本におけるそれを比較して以下のようにも述べている。

グリムのメエルヘンを読んで見ると、滑稽に富んだ長々しい結びの文句が、或地方のものに限つて付いて居る。人によつては是を其話だけの必然なる一部分の如く思ふ者もあらうが、実はただ採集者が個々の採集に忠誠であつたといふのみで、それと本文との間には格別の連鎖は無く、少しも変へずに之を別の話を持つて付けられるものばかりである。つまりはグリム生時の独逸の田舎には、もう此程度の改造した結びの文句しか行はれて居なかつたので、是を日本の昔話の、まだ色々の古風な形式を保存して居るのに比べると、研究の便宜は確かに少ない。だから我々は今後こ

の一点の綿密な調査からでも、まだ外国の学者の気づかなかつたものを拾ひ上げることが出来るのである。⁽¹⁵⁾

ここで柳田は、外国の昔話に比べると日本の昔話には古くから伝えられてきた形式が保存されているものが多いゆえに、この点において日本の昔話研究の発展が世界の昔話研究に貢献しうることを強調している。そして、日本の昔話の形式について着目した柳田は、昭和十七年三月に論考「昔話の発端と結び」を著した。⁽¹⁶⁾この論考において柳田は日本における発端句と結末句の地方的変化の特色、傾向を明らかにしようと試み、「昔話と伝説と神話」で柳田自身が言及した課題、すなわち日本国内の昔話の形式の比較という課題に取り組んでいる。

柳田のこれらの諸論文、およびKHMへの書き込みを照らし合わせた時に浮かび上がってくることは、柳田はKHMそのものに興味があったというよりは、当時まだ海外の研究者にはあまり知られていなかった日本の昔話に特有なものを研究するための参考資料としてKHMを読んでいたということである。柳田は日本国内の昔話研究を進展させ、それを世界に発信することにより、日本が「世界の

民間説話の実験所⁽¹⁷⁾」となることを望んでいたのではないだろうか。

5. 比較昔話研究の資料としてのKHM

柳田による書き込み調査から指摘される第二の点は、柳田は、日本の昔話と共通する類話、あるいはモチーフを対比させながらKHMを読み進めていたということである。柳田の書き込みが見られるKHMのうち、柳田國男監修『日本昔話名彙』に対応する類話の対応表を資料1にまとめた。

特に顕著なのは、三七番「親指小僧」や八八番「歌って跳ねるヒバリ」、一〇八番「ハンスはりねずみ」、一四四番「小さなロバ」など、柳田は日本の「一寸法師」や「田螺長者」といった小さ子に関するKHMの類話に関心を払っていたことである。柳田國男の本格的な昔話研究は『桃太郎の誕生』をもって出発しているが、ここでテーマとなっているのは「小さ子」であり、このテーマに関連した論文として他にも、『桃太郎の誕生』⁽¹⁸⁾以前に発表された「一寸法師譚」（昭和三年五月）や「桃太郎根原記」（昭和五年五

月)⁽¹⁹⁾が挙げられる。この「桃太郎根原記」の中で柳田はシンドレラ比較研究の大家であるコックスの研究を紹介し、日本の紅皿欠皿や粟福米福の話に言及⁽²⁰⁾、さらに、二八番「歌う骨」に関係の深い死人感謝譚や「美女と野獣」などの異類婚姻譚にも触れている。

年をとって社会からはじき出される人、あるいは動物を扱った「年取ったおじいさんと孫」や「老犬ズルトン」の類話として日本では「姥捨山」が挙げられるが、柳田は「親棄山」で、日本には四種のサブタイプがあり、うち二つは外国から入ってきたものだとして述べている⁽²¹⁾。昔話や民俗学的にも興味深い一六番「三枚の蛇の葉」や一〇五番「ウンケのお話」、その他、一一八番「三人の軍医」、九八番「物知り博士」や一四三番「旅に出る」などの笑話や二番「猫と鼠の共暮らし」や一七一番「ミソサザイ」等の動物昔話にも注目していることがわかる。また、日本にも類話のえられる由来譚「藁と炭とそら豆」など関心領域は幅広い。一一二番「天国のからさお」では、〈豆の木〉の書き込みがあり、柳田はこのモチーフに関して、論考「天の南瓜」を発表している⁽²²⁾。一三五番「白い花嫁と黒い花嫁」には〈皿々山〉と〈エスガタ女房〉、一八六番「本当の花嫁」

にも〈皿々山〉の書き込みが見られ、本当の花嫁を探するというモチーフに注目している。さらに、一九二番「泥棒の名人」の日本の類話「俵薬師」に関しても柳田は論考「俵薬師」⁽²³⁾を、KHM八六番に書き込まれている〈はてなし話〉に関連して、論考「はてなし話」を出している⁽²⁴⁾。これらの論文を見ると、柳田は外国の昔話を中心に論じているのではなく、外国の昔話を参考にしながら、日本の昔話を中心に論じている。前述した昔話の定義づけに関してもそうであったが、柳田は日本の個々の昔話研究を行なっていく上でもKHMを参考にしていたようである。

6. 結語

柳田國男が日本民俗学を確立する上で、フレーザーやゴムなどイギリス民俗学から方法論などを取り入れていたことはこれまで多くの研究者が指摘してきたことである。しかしながら、柳田のKHMへの書き込みを調査してみると、日本の昔話と対応するKHMの話に多くの書き込みが見られ、それらの類話に関する論考を『桃太郎の誕生』を皮切りに次々と発表していることが明らかとなった。さら

に柳田は昔話を形式的な観点から定義づける上で、KHMを参照、参考にしていたことが書き込み箇所から明らかとなった。柳田國男は本格的に昔話研究を開始するにあたってKHMを精読し、比較研究のためのテキストとして用いていたと言えよう。しかしながら、本稿は柳田文庫所蔵の基礎文献の調査を中心としたものであって、柳田がKHMをどのように読み、日本の昔話と比較した結果、どのような結論に至ったか、その思索過程を詳細に検討するまでには至らなかった。本稿で紹介したグリム兄弟の『子供と家庭の童話集』以外にも柳田文庫には英独仏を中心とした膨大な量の文献が収められており、柳田の思索過程を辿るには、これらの文献に残されている書き込みや傍線のさらなる調査が必要である。それらの調査は本稿と対をなす形での別の機会に改めて論じることにはしたい。

謝辞

本稿執筆の準備段階で、成城大学民俗学研究所の林洋平様に大変御世話になりました。ここに深く感謝の意を表します。

注

(1) 【柳田とイギリスの民俗学および人類学関係に関する研究】

高橋治「柳田國男におけるG・L・ゴナム受容の一断面―大正中期の〈供儀〉論の受容と関連させて」『柳田國男の学問は変革の思想たりうるか』柳田國男研究会編、泉社、二〇一四年、二六三―二八三頁。横山茂雄「英国に住む野人也…南方熊楠、柳田國男の山人論争とジョージ・ローレンス・ゴム」(特集 南方熊楠と民俗学)『季刊民族学』三六(一)号、二〇一二年、一五―二四頁。横山茂雄「歴史の致命的な沈黙―ローレンス・ゴムと柳田國男の先住異民族説」『外国文学研究』二六号、二〇〇七年、一五〇―一六六頁。高木昌史編『柳田國男とヨーロッパ』口承文芸の東西』三交社、二〇〇六年。赤坂憲雄「一国民俗学を越えて」五柳書院、二〇〇二年。佐伯有清「柳田國男と古代史」吉川弘文館、一九八八年。高原隆「ジョージ・ローレンス・ゴム民俗学の柳田國男への影響について」『日本民俗学』二一七号、一九九九年。伊藤幹治「柳田國男とJ・Gフレイザーの『金枝篇』」『民俗学研究所紀要』第二二集・別冊、成城大学、一九九八年。田中藤司「柳田文庫所蔵読了日記洋書目録・略年表」『民俗学研究所紀要』第二二集・別冊、成城大学、一九九八年。長谷川邦男「柳田國男とイギリス民俗学の系譜Ⅰ」

資料1 柳田國男による書き込みのある KHM の類話と『日本昔話名彙』の対応表

KHM	柳田『日本昔話名彙』
二 猫と鼠の共暮らし	猫と鼠
一八 藁と炭とそら豆	炭とわらしべと豆
二一 灰かぶり	継子の椎拾い、米福栗福、紅皿欠皿、姥皮、灰坊太郎
二八 歌う骨	歌い骸骨
三一 手なし娘	手無し娘
三七 親指小僧	一寸法師
六五 千匹皮	(姥皮)
七八 年取ったおじさんと孫	姥捨山
八七 貧乏人と金持ち	大歳の客、大歳の火、弘法機、打出小槌
八八 歌って跳ねるヒバリ	田螺長者、蛙婿入、蛞蝓婿
九八 物知り博士	見透かしの六兵、功名の鼻利き
一〇八 ハンスはりねずみ	(田螺長者)
一一八 三人の軍医	どうもこうも
一三四 六人の家来	力太郎
一三五 白い花嫁と黒い花嫁	継子の椎拾い、(皿々山、絵姿女房)
一四三 旅に出る	愚か婿、ぐづの話、茶栗柿
一四四 小さなロバ	(田螺長者)
一五一 三人の怠け者	無精競べ
一五八 のらくら者の国の話	うそ話
一七一 ミソサザイ	ミソサザイは鳥の王
一八六 本当の花嫁	(皿々山)
一八七 兎とハリネズミ	虱と蚤、動物競争
一九二 泥棒の名人	弟出世、俵薬師

柳田国男研究会編『柳田国男・ジュネーブ以後』三一書房、一九九六年。川田稔『柳田国男の思想的的研究』未來社、一九九四年。ロナルド・モース『近代化への挑戦 柳田国男の遺産』岡田陽一・山野博史訳、日本放送出版協会、一九七七年。

【フランスの民俗学および口承文芸研究との関連】

ジュデオ・ユエ『民間説話論』関敬吾監修、石川登志夫訳、同朋舎出版、一九八一年。高木昌史編『柳田国男とヨーロッパ』口承文芸の東西』三交社、二〇〇六年。田中藤司『柳田文庫所蔵読了日記洋書目録・略年表』『民俗学研究所紀要』第二二集・別冊、成城大学、一九九八年。川田稔『柳田国男―「固有信仰」の世界』未來社、一九九二年。岡谷公二『柳田国男とアナトール・フランス』『日本民俗学』一四一号、一九八二年、一一―一二頁。

【グリム関係】

岩本由輝『補訂・柳田国男の紀行文芸をめぐって―「グリムの昔話」における書き換えの問題を含めて―（上）（下）』『柳田国男「遠野物語」作品論集成（三）』石内徹編、大空社、一九九六年。高木昌史編『柳田国男とヨーロッパ』口承文芸の東西』三交社、二〇〇六年。高木昌史『柳田国男とグリム学―「遠野物語」の位置』『現代思想 柳田国男「遠野物語」以前／以後』二〇一二年、二一五―二三頁。

【ハイネ関係】

林正子『柳田国男のハイネ受容による〈民族〉の発見―〈民族精神〉の高揚と〈民俗学〉隆盛の連環を考究するために』『岐阜大学国語国文学』三六号、二〇一〇年、一九―三五頁。ルートウム・ペーター (Lutum Peter) 『柳田国男の（一）国民民俗学』誕生に関する一考察―ハイネリッヒ・ハイネ著『流論の神々』の思想的な影響―。『民俗学研究所紀要』二七号、二〇〇三年。一〇五―一二四頁。ハイネと柳田との関係に関する参考文献は右のルートウム・ペーターの論文二二三―二四頁に詳しい。

右の文献以外にも、スイスを中心とした滞欧中の柳田の足跡などを詳しく研究し、ヨーロッパでの体験が柳田の国民民俗学の形成に多大な影響を及ぼしたとする以下の研究も参照した。岡村民夫『柳田国男のスイス―渡欧体験と一国民民俗学』森話社、二〇一三年。

(2) 『民俗学研究所紀要』第二二集・別冊、成城大学、一九九八年の伊藤幹治氏によるまえがき、および長谷川邦男『柳田国男とイギリス民俗学の系譜Ⅰ』柳田国男研究会編『柳田国男・ジュネーブ以後』三一書房、一九九六年、五一頁等を参照。

(3) 柳田国男『定本柳田国男集』別巻第五、筑摩書房、一九八三年、六三四―六三五頁。以下、『定本柳田国男集』は「定本」と略記する。

(4) 『グリムの御伽話細註』とは、ホルテ／ポリフカによるグリム兄弟の『子供と家庭の童話集』の注釈書のことである。柳田文庫には以下の五冊が収められている。Grimm, Jacob und Wilhelm. Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. Neu bearb. von Johannes Bolte und George Polvka. Leipzig, Dieterichsche (Bd.1 1913, Bd.2 1915, Bd.3 1918, Bd.4 1930, Bd.5 1932)。出版年から、柳田が滞欧中に日本に送ったのは一巻から三巻で、四巻、五巻は帰国後に購入したと考えられる。

(5) 成城大学民俗学研究所によると収録冊数は以下の通りである。①単行本…和漢書一万五〇四二冊、洋書一四三四冊②逐次刊行物…和雑誌一三七九タイトル(約一万八一〇〇冊)、洋雑誌八一タイトル(約九〇〇冊)③その他の図書資料…別刷その他七三八冊。成城大学民俗学研究所編『増補改訂 柳田文庫蔵書目録』、成城大学民俗学研究所、二〇〇三年。

(6) 高木昌史氏および田中藤司氏の研究に関しては注(1)を参照。高橋治「柳田国男の洋書体験 一九〇〇—一九三〇—柳田国男所蔵洋書調査報告」『柳田国男・民俗の記述』柳田国男研究会編、岩田書院、二〇〇〇年、二〇五—二五五頁。その他、ロナルド・A・モースは柳田文庫に所蔵されているG・L・ゴムの『歴史科学としての民俗学』*Folklore as an Historical Science*への書き込み箇所

を一部再録している。注(1)二六二—二六六頁を参照。ルートウム・ペーターは注(1)で挙げた論文において、柳田文庫所蔵のハイネの“Deutschland. Ein Wintermärchen”や“Alta Troll”にみられる柳田の書き込みについて二、三言及している。

(7) 現在、レクラム文庫から刊行されているKHMは第一巻に一番から八六番、第二巻に八七番から二〇〇番、および子供の聖者伝と決定版には収録されなかった話(補遺)が収録されており、第三巻は注釈編となっている。

(8) 第三巻の注釈編は一九〇八年、一九一八年、一九三〇年にもレクラム文庫より再版されている。

(9) 注6、高橋治、二一六頁。

(10) 注3、六二四頁。

(11) KHMの訳出にあたっては、以下の邦訳書を参考にした。
『完訳グリム童話集』一一五巻、金田鬼一訳、岩波文庫、一九七九年。

(12) 柳田国男「昔話採集者の為に」(『昔話覚書』所収)定本・第六巻、筑摩書房、一九八三年、三四—三六六頁。初出は一九三一年四月「旅と伝説」四巻四号。

(13) 柳田国男「昔話と伝説と神話」(『口承文藝史考』所収)定本・第六巻、筑摩書房、一九八二年、五八—一二七頁。初出は一九三五年五月—一九三六年四月「昔話研究」一—十二号。

- (14) 注13、六〇―六一頁。
- (15) 注13、六二頁。
- (16) 柳田國男「昔話の発端と結び」(『昔話覚書』所収) 定本・第六卷、筑摩書房、一九八二年、三六七―三九〇頁。初出は一九四二年三月(初版本文末)。
- (17) 注16、三六五頁。
- (18) 柳田國男「一寸法師譚」(『物語と語り物』所収) 定本・第七卷、筑摩書房、一九八〇年、五一―一九頁。初出は一九二八年五月「民族」三卷四号。
- (19) 柳田國男「桃太郎根原記」定本・第三〇卷、筑摩書房、一九八三年、一四八―一五七頁。初出は一九三〇年五月「文学時代」二卷五号。
- (20) 注19、一四八―一四九頁。その他、「灰かぶり」や「千匹皮」と関係の深い類話「姥皮」に関する柳田の論考は以下を参照。柳田國男「姥皮と蛙報恩」、「昔話の継合せ」、「鶯の卵と桃の酒」(『童話小考』所収) 定本・第八卷、筑摩書房、一九八〇年、四六五―四七二頁。初出は一九三六年二月―四月「昔話研究」。
- (21) 柳田國男「親棄山」(『村と学童』所収) 定本・第二二卷、筑摩書房、一九八三年、二九四―三〇五頁。初出は一九四五年二月―三月、「少女の友」三八卷二号―三号。
- (22) 柳田國男「天の南瓜」(『昔話覚書』所収) 定本・第六卷、筑摩書房、一九八二年、四二〇―四三一頁。初出は一九四一年四月、六月「文藝世紀」三卷、四号、六号。
- (23) 柳田國男「俵薬師」(『昔話覚書』所収) 定本・第六卷、筑摩書房、一九八二年、四三二―四三六頁。初出は一九三九年四月「博浪沙」四卷四号。
- (24) 柳田國男「はて無し話」(『昔話と文学』所収) 定本・第六卷、筑摩書房、一九八二年、三〇八―三一三頁。初出は一九二九年十二月「遊牧記」一号。